

原典に近づき、元本に触れる

—図書館の使い方—

石塚 純一(図書館長)

今学期も終わりに近づき、レポートや定期試験で教員も学生もいそがしい。秋学期に私が担当した講義科目は、「メディア基礎論Ⅱ」(池田正之先生と松友知香子先生とのオムニバス授業)と「デザイン論」だが、集まったレポートの話から始めよう。

◆レポートを書くために

「メディア基礎論Ⅱ」のレポート課題は、「マクルーハンの言葉『メディアはメッセージである』と『メディアはマッサージである』について、どういうことが言いたいのか調べて答えよ」というものだった。レポートの中で評価が低いのはインターネットからのコピペだ。よく考えず、意味も良く分からない箇所がそのまま写されている。しかも同じ箇所を何人も学生がコピペしているから、読んでいてつい笑ってしまう。これは論外だが、シラバスに参考文献として挙げたマクルーハンの解説書や事典類を調べれば、課題の言葉がメディアを広く解釈し、常識をひっくり返す考え方だとすぐに理解できるだろう。さらにもう一步踏み込んだレポートもいくつかあった。それはマクルーハン自身の著書に当たった学生のものだ。『メディア論』や『グーテンベルクの銀河系』(共にみすず書房)といった分厚い本を取り上げている。これらの中から彼の言葉「メディアはマッサージ」に関連する箇所を見つけ出すのはなかなか骨が折れる。しかし、たとえ答えが見つけれなかったとし

ても、原典を手にとると、メディアが実は人間の手の延長にあることや、文字(活字)メディアの長い歴史がいよいよ転換の時期を迎えたことがわかるし、「クールなメディア」、「ホットなメディア」というキーワードを知るといった、レポートの質問に対する答え以上の知識に接するかもしれない。これこそが面白みであり、とても大事であると同時に、もしレポートに加筆されていれば評価は上がるというもの。

◆A.ガウディの建築に会いにバルセロナへ

「デザイン論」のレポート課題は、20世紀のアーティストやデザイナー、あるいはデザイン運動の中から自分が興味を持ったものを選んで調べなさいというものだった。マッキントッシュやミュシャやコルビジエ、バウハウス、アールデコなどについて調べるのは比較的簡単だろう。参考文献はたくさんある。ある建築家の生没年と時代背景を調べ、どのような建築を建て、誰にどんな影響を与えたか、デザインの特徴はといったことがまとめられていけばまず及第。しかし、私が内心目論んだ、伏線というか導火線ともいべき仕掛けは、例えばガウディA.Gaudíについてならば、図書館2階の窓際奥にある大型美術本のコーナーに置いてあるガウディの建築を集めた写真集に行きつくことなのだ。そんなによく読む必要もない。ページをめくってただ次々に現れる異様な塔の形、

奇獣を象ったカラフルな装飾タイルを配した公園、でこぼこ曲線の正面(ファサード)を持つアパートの全体像や室内などを眺めれば、きっと心が動く。なんでこんなものを造ったのだろうと。スペインのバルセロナに飛んで行ってしまいたくなったら、さっさとレポート課題を片付けて、アルバイトの金を貯めて実際行ってみればいい。

あるいはドイツの総合デザイン学校、バウハウスBauhausについて調べるならば、山口文庫に図録や写真集が幾冊もあるが、バウハウスで当時(1926年ころ)編集出版された「バウハウス叢書」(中央公論美術出版)が、原著と同じ体裁で翻訳され、図書館にある。原典に近いものだ。カンディンスキー「点と線から面へ」モホリ・ナジ「材料から建築へ」グロピウス「国際建築」など小ぶりな薄い本を手にとってみると、絵画、彫刻、写真、ポスター、舞台美術、建築を総合しようとする1920年代の実験的な学校の熱気が伝わり、個性豊かなデザイナーたちの造形と思想に触れる。現代につながるモダニズム・デザインの源流を感じることができよう。

◆内田魯庵の『バクダン』

私が原稿を書く時も、原典を手にして思わぬ得をしたり、また芋づる式に元本を探して遠回りし、楽しすぎてなかなか書けなくなったりする。もう一昨年の暮れになるが、山口昌男「内田魯庵山脈」(岩波現代文庫)の解説を書いた。本書は札幌大学の元学長だった山口先生の最も近年の大作の文庫化だから、近代史の見直しを迫る山口昌男が考えたことに焦点をあてて書き、魯庵については全集を多少参照する程度であった。ところが魯庵の随筆集『バクダン』をどうしても入手したくなる事情が起こった。全集に収められた『バクダン』は図版ページが削られ、ルビ(ふりがな)の付け方などに不備があるということがわかったからだ。大正11(1922)年刊の原本に当たってみようと思ったのである。

実は文化学部の第一期生であるG君が、東京で編集者(東京外国語大学出版局に勤務)になったのだが、相談があると言うので昨年末に横浜で会った。山口先生の「内田魯庵山脈」を読み、その中の『バクダン』についての記述がすごく面白かったので、これを復刊したいという。M社に相談したところ、誰か編・解説者を立てれば出版を検討するというので、私に編者になってくれなにかというのである。長年「出版文化論」を大学で講じてきた者としては、卒業生と具体的な本の企画の話をするというのは何とも嬉しいことだった。できるだけのことをしようと『バクダン』の原典を改めて読み始めたのである。

その一節に「学者文人の歳晩」がある。魯庵は書く。江戸時代の儒者伊藤仁斎は貧しくて、年末なのに餅を搗くことが出来なかったという話から、「学者や文人は世界のドコへ行つても貧乏してゐる」と続け、ドストエフスキーの話に及ぶ。ドストエフスキーの手紙を紹介し、彼は大作『罪と罰』を発表して3年後、文名が高まり収入も多かったものの、シベリアの苦役時代の負債が残り、兄と共同経営の出版社が筆禍事件で禁止され、兄が死に、寡婦と遺児の面倒を見なければならぬという重荷を背負っていた。さらには二度目の妻と結婚し、ジュネーブに逃げ出すように旅した時は、出来心から博打に手を出して深みにはまり、スッカランになって出版社に借金を申し込む、妹宛の手紙にはその日をしのぐために所有品を質入れし、妻の出産は近づくがその費用がない、仮の住まいにはストーブもなかったという。そういう中で稼ぐためにコツコツと書いていたのがあの『白痴』だったという。魯庵はドストエフスキーを日本に翻訳紹介したごく初期の人物だ。この貧窮のありさまが文人への同情(シンパシー)とともに面白く綴られている。こういう箇所を読むと『白痴』がもう一遍読みたくなる。江戸時代の儒者がそんなに貧しかったのかも気になって『先哲叢談』(東洋文庫)にも手が伸びる。こうして元の本へ本へと図書館をめぐり、なかなか出て来られなくなるのだ。



山口文庫の一角に美術本コーナーがある。それは20世紀初期のヨーロッパの美術・文化に集中する特徴を持つ。アール・デコ、ロシア構成主義、未来派などに関する洋書群だ。これらは60、70年代の山口昌男の著「知の祝祭」などの世界に通じると同時に、近年の著作「挫折の昭和史」などで取り上げる1920-30年代の昭和モダニズムにも通じ、蒐書に一貫した思想が認められる。

